令和8年熊本地震「災害派遣」任務完遂





１０年前の教訓を活かして





（右上）発災直後、被害状況等の情報収集のため、離陸するＵＨ－１Ｊ（ヘリ映伝機）
（左上）熊本県庁に派遣されたＬＯが、県職員と連携して被害状況の確認及び調整等を実施
（右下）倒壊した建物において救助・捜索活動に従事する隊員
（左下）入浴施設を利用するために訪れた被災者と目線を合わせて会話する隊員

西部方面隊

令和８年７月28日１６２７頃、熊本県熊本地方を震源とする最大震度７の地震が発生しました。この度の地震により犠牲となられた方々に深く哀悼の意を表しますとともに、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。同日、熊本県知事から第８師団長に対し、災害派遣要請があり、第８師団を中心とする自衛隊員最大約５，１００名態勢により、直ちに人命救助や生活支援を開始しました。

西部方面隊は、八代市、宇土市、宇城市、氷川町を中心として、多くの家屋の倒壊、長期の断水等、甚大な被害の発生に伴い、これまで経験のない酷暑下で避難生活を強いられる被災者に寄り添いつつ、人命救助、給水支援、物資輸送、入浴支援等を実施しました。

また、派遣期間中に大型の台風の接近、断水環境下での林野火災の発生に対し、２次災害防止に係る活動を実施するとともに、10年前の熊本震災の教訓を活かし、自治体等との緊密な連携、地域における統合運用により、時間の経過とともに変化する被災地のニーズを踏まえて活動しました。

酷暑の中、被災者に寄り添い救援活動

第８師団任務完遂

迅速な初動対応、自治体等との緊密な連携、地域統合運用を実践



イオンモール熊本における人命救助活動



海自と連携した給水支援

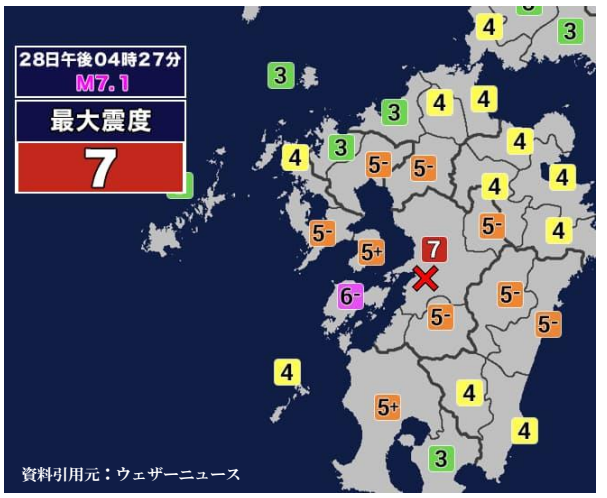
令和８年熊本地震に際し、第８師団長は熊本県知事からの災害派遣要請を受け、直ちに所要の部隊を展開し、被災者の救助、捜索、生活支援等の災害派遣活動に従事しました。

酷暑の中にあっても、隊員は被災者一人ひとりに寄り添い、自治体等と緊密に連携しながら、被災地域のニーズに即した支援を継続しました。

また、陸上自衛隊のみならず、海上自衛隊及び航空自衛隊との統合運用における連携を実践し、それぞれの能力を最大限に活用して迅速かつ効果的な支援を実施しました。

さらに、関係機関との情報共有・調整を徹底し、地域の実情に応じた柔軟な運用を実現するなど、迅速な初動対応、自治体等との緊密な連携、地域における統合運用を実践し、与えられた任務を完遂しました。

再び熊本を襲った大地震



令和８年７月２８日１６２７頃、地震発生時の震源及び震度分布

令和８年７月28日１６２７頃、熊本県熊本地方を震源としたマグニチュード７．１の地震が発生し、宇城市及び氷川町で最大震度７を観測しました。八代市、宇城市、氷川町を中心とする県南地域で被害が大きく、熊本市、宇土市、美里町、益城町などでも震度６強を観測し、各地で建物の倒壊・損壊、道路や橋梁等の損傷などの被害が発生しました。また、停電、断水、通信障害等のライフラインへの影響や交通機関の運休・通行規制も生じ、住民生活や物流、社会活動に広範な影響を及ぼしました。さらに、発災時期が一年で最も暑い酷暑期と重なったことから、避難生活や救助・復旧活動においても厳しい暑さへの対応が必要となりました。

現在もなお、被災地域では生活基盤やインフラの復旧に加え、地域の再建・復興に向けた取り組みが続けられています。

「平成28年熊本地震」

平成28年熊本地震は、４月14日に発生した前震（最大震度７）と、４月16日に発生した本震（最大震度７）という、極めて稀な連続した巨大地震でした。熊本県熊本地方を震源とし、熊本市、益城町、阿蘇地域などを中心に甚大な被害をもたらしました。

建物への被害は激しく、多くの家屋が倒壊したほか、熊本城の天守閣や櫓などが損壊し、地域のシンボルに大きな打撃を与えました。また、地滑りや断層による地盤の変動、大規模な停電や断水が発生し、住民生活に深刻な影響を及ぼしました。

死者・行方不明者は２７３名に上り、避難生活の長期化に伴う「災害関連死」が大きな社会問題となったほか、国として初の「プッシュ型支援」が導入されるなど、大規模災害対処における、多くの教訓を残した災害となりました。

鎮西

令和８年熊本地震災害派遣特別号

編　集
陸上自衛隊
西部方面総監部
総務部広報室
電話　096-368-5111

即時救援活動

即応、人命救助・捜索

嘉島町のイオンモール熊本における地震後の大規模な爆発事故、八代市の日本製紙八代工場における巨大な煙突の倒壊、各地における家屋の倒壊に対し、警察・消防と連携して人命救助及び安否不明者の捜索活動を実施しました。

この際、二次災害のリスクが高く隊員が立ち入れない区域には、民間専門組織（ＪＵＩＤＡ等）に協力を要請し、小型ドローンを投入して、捜索活動を実施しました。

また、ライフラインの途絶えた病院から患者を移送するため、ヘリコプターによる航空搬送を実施しました。



患者の航空搬送



日本製紙八代工場においてドローンを活用して
人命救助・捜索に従事する隊員



イオンモール熊本において警察、消防等と連携して
人命救助・捜索に従事する隊員

二次災害リスクと時間との戦い。

「命を守る」

２次被害防止への対応

林野火災対応

熊本地震の災害派遣中の８月６日、被災地である宇城市において林野火災が発生、ヘリコプターによる空中消火３回、約15トンの散水を行い、地震と並行した災害対応を実施しました。



空中消火活動



消火用器材準備

台風への備え

大型の台風13号の接近に伴い、被災した住家の雨漏りや風雨の侵入による二次被害（被害拡大）を防ぐための緊急対策として、ブルーシート展張作業を支援しました。



関係機関と連携したブルーシート展張支援

総理大臣現地視察

令和８年８月３日、高市総理が、熊本地震の被災状況視察のため熊本を訪問されました。



写真引用元：首相官邸ホームページ

陸自ＣＨ－４７ＪＡによる航空視察を終えた高市総理

応急救援活動

被災者に対する緊急支援

被災地では、断水、停電等ライフラインが途絶える中、人工透析に多量の水を必要とする医療機関に給水支援を実施して被災地の医療を支援しました。

また、厳しい暑さの中で避難生活を送る被災者にプッシュ型支援として届けられた飲料水（ペットボトル）を各避難所に輸送しました。

さらに、熱中症対策として緊急調達されたクーラー（ポータブルエアコン）約３００台を航空自衛隊と陸上自衛隊が連携して輸送する等、酷暑下での避難生活を余儀なくされる被災者に対する緊急支援を行いました。



医療機関への給水支援

酷暑下にライフラインを
奪われた被災者を救う。



空自機によるポータブルクーラー空輸



陸自Ｖ－２２による飲料水輸送

応急復旧支援活動

長期化する避難生活を支援

猛暑下の過酷な避難生活を支える。

入浴支援

西部方面隊は、海上自衛隊、航空自衛隊及び熊本県内の各自治体等と連携し、断水や住宅の被害で入浴設備が使えない被災者を対象に、避難所や防災拠点等の特設会場でシャワーによる入浴支援を実施しました。



入浴施設を利用した子供たちからのメッセージ



入浴施設に訪れた子供たちに飲料水を配布



厳しい猛暑の中での入浴施設の準備

給水支援

八代市や氷川町等の被災地域において、自衛隊、自治体及び水資源機構等が給水タンク車等を展開して、飲料水や生活用水を供給しました。



水トレーラーによる給水支援



小さな子供もお手伝い

「被災者のために」

物資輸送

自治体等のニーズに基づき、飲料水等の物資を避難所や被災者の手元に届くまで輸送しました。

また、在日米軍が横田基地等から輸送機により熊本へ飲料水等の救援物資を輸送し、自衛隊が物資集積所や避難所へ輸送する等、日米が協力・連携しました。

日米の絆



日米の協力・連携



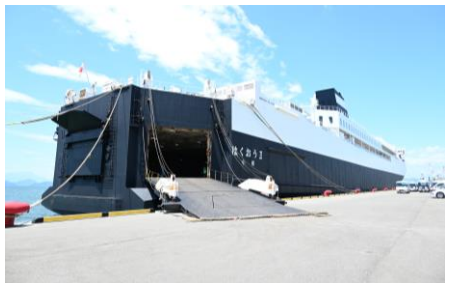
米軍からの救援物資



物資の積載作業

関係機関と連携した支援

内閣府、はくおう運営委託業者等と連携して、防衛省が借り上げた民間船舶（はくおう）により、東部方面隊の隊員及び委託業者等が入浴・宿泊・医療支援を実施しました。



はくおうⅡ（八代港）



施設利用受付



入浴支援部隊・隊員激励

防衛省・自衛隊一丸

防衛大臣現地視察

8月23日、小泉防衛大臣が熊本県内の被災地・避難所等を訪れ、災害派遣活動に従事する陸海空自衛隊の部隊・隊員を視察・激励されました。



臨時記者会見



入浴支援部隊・隊員激励



物資集積所から避難所へ車両輸送

令和8年熊本地震災害派遣に従事した隊員等所感

災害派遣現場における人命救助に従事して



樫澤３佐（第４２即応機動連隊第１中隊長）

令和８年７月２８日（火）に発災した令和８年熊本地震において、イオンモール熊本での人命救助の現地指揮官として災害派遣に従事しました。同日夕頃に命令を受領し、一部を当日中、主力を翌日早朝に前進させました。到着すると２階部分が大きく崩落した建物において消防・警察等の各機関が懸命に人命捜索及び救助を実施しており、大変な事態になったと感じました。警察、消防及び陸上自衛隊の現地調整の結果、建物内部において消防が人命救助、警察が人命捜索を実施し、外側から周囲の瓦礫撤去を陸上自衛隊が担当することとなりました。作業を進めていたところ、建物の崩落状況により内部からの人命捜索が困難となったことから、外側から瓦礫撤去した経路から内部に進入し、要救助者の発見及び救助に繋がりました。この際、油圧ドーザとその操作手が日々の演習で培った器材操作能力により人命救助に至り、日々の訓練で培った練度及び調整能力が任務に直結することを実感しました。

初の災害派遣活動に従事して



廣瀬３尉（西部方面特科連隊第１大隊第１中隊）

私は令和７年１月から西部方面特科連隊第一大隊第一中隊に勤務しています。令和８年７月２８日に熊本県を襲った震度７の地震により、部隊勤務２年目にして、初めて災害派遣活動に従事することになりました。その中で、日本製紙八代工場における要救助者の捜索活動に現場の指揮官として参加し、強い使命感をもって部下隊員を指揮するとともに、自らも現場に立ち、隊員と一体となって捜索、救助及び搬送活動に従事しました。酷暑に加え余震が続く厳しい環境の中で、疲労が蓄積する状況にあっても、要救助者とそのご家族のため、献身的かつ粘り強く、任務を遂行しました。その際、私は、経験豊富な隊員からの現場に即した意見具申を積極的に取り入れ、隊員の体調や疲労度、現場の危険箇所、余震による状況変化を継続的に把握し、臨機応変に捜索及び救助の要領を修正するとともに、安全管理を徹底しました。また、警察・消防等の関係機関と緊密に連携し、現場の状況や捜索範囲、活動要領について綿密な調整を行いました。その結果、部隊一丸となって所命の任務を完遂し、要救助者の発見・救助及びご家族への引き渡しに寄与できました。今後も、多様な任務の完遂に向け一層精進して参ります。

平成２８年熊本地震で被災し、今回、災害派遣に従事して



宮守３曹（第８後方支援連隊第１整備大隊通信電子整備隊）

１０年前、熊本地震を経験した私は、いつも当たり前に過ごしていた日常が当たり前ではないことや災害時に多くの方々に助けてもらい、その存在にどれほど勇気づけられ、励みになったかということを覚えています。その経験を機に、自分もいつか恩返しをし、多くの方々を助け、困っている方の力になれる存在になりたいと思うようになりました。

自衛隊入隊後、実際に今回、入浴支援の災害派遣に従事し、被災された方々と接する中で、当時、自分が被災者として感じていた不安な気持ちを思い出し、自分が勇気をもらったように、被災者に少しでも安心させたいという思いで接するようにしました。１０年前に助けられる側であったのですが、今度は災害派遣を通じて、助ける側として任務にあたることで、恩返しをすることができ、とても誇りに思うとともに、心から災害派遣に参加して良かったと実感しています。

この経験を忘れず、これからも一人でも多くの人を助けることができるように、日々の訓練、任務に励んでいきます。

令和８年熊本地震災害派遣（入浴支援）に従事して



木戸川１士（第４後方支援連隊補給隊）

令和８年８月３日から宇城市において災害派遣に伴う入浴支援に従事しました。

私は学生の時、自衛隊が災害派遣で活躍している姿を見て、被災された方々の力になりたいという思いから陸上自衛隊に入隊しました。入隊して約１年が経ち、初めての災害派遣であったので、不安や緊張がありましたが、現地で入浴支援を行う中で、被災された方々の生活状況を目の当たりにし、自分達の活動によって被災された方々に少しでも勇気や希望を与えることが出来たら、という思いも日々強くなりました。

入浴支援には幅広い年代の方が来られ、子供達と話をしたり、高齢者の方を介助する中で、「ありがとう」「助かりました」と声をかけていただいたことで、自衛官としてのやりがいを感じ、自分自身も更に頑張ろうという気持ちになりました。

今回の経験を通して、災害はいつ、どこで起こるか分からず、誰しもが被災する可能性があることを改めて実感したとともに、今後も引き続き、いかなる状況においても迅速に行動できるよう、日頃から物心両面の準備を整えていきたいと強く思いました。

宇城市林野火災発生に伴う災害派遣に従事して



須上３曹（西部方面ヘリコプター隊第３飛行隊）

8月6日（木）の夕方、林野火災の情報が入りました。すぐに空中消火実施の命令が下り、私も出動することになったため、空中消火の活動可能時間である日没が迫る中、急いで準備を開始しました。

私の部隊は災害派遣への出動が多くあり、私も令和5年9月の部隊配置から計6回（内、3回が林野火災への対応）の災害派遣に従事し、いつでも出動できるよう個人の荷物をまとめていました。部隊の準備が整い、航空機に乗り込み、火災現場近くの準備地域に着陸しました。

準備地域の近くには避難所があり、最初に着陸する際、上空から避難された方々の姿が確認でき、早く消火して安心してもらいたいとの思いが強まりました。その間、関係自治体等との連携も完了し、合計3回の空中消火を実施することができました。その日の深夜の内に鎮圧の知らせを受け、自分達の任務が地域の方々のお役に立てたと安堵することができました。

今回、常に周りに気を配りつつ安全に活動できたことは、普段からの物心両面の準備が任務完遂に繋がっていることを強く実感したため、今後の業務にも活かしていきたいと思います。

災害派遣での米軍ＬＯとしての所感



ジョー・ユンイ大尉（西部方面総監部在日米陸軍連絡将校）

着任してちょうど３週間目、震度７の「令和８年熊本地震」が起きました。

０８ＪＸＲ（統合防災訓練）が終わったばかりのタイミングで、西部方面隊は第８師団を中心に、命に係わる最初の「７２時間」の現場で必死に活動していました。私は、毎日作戦現況報告に出ては、その内容をすぐに米陸軍司令部に送っていました。けれど、増えていく被害者の数を見るたびに、「自分に何かできることはないだろうか」と、ずっともやもやした気持ちを抱えていました。

８月に入り、アメリカからの物資支援が決まったと聞いて、すぐに関係部署に必要な物資の希望を確認し、レポートをまとめて提出しました。そして、８月８日（土）の１６時ごろ、自宅にいた私に「明日、米軍の輸送機で熊本へ物資を運ぶ」という命令が入りました。すぐにオフィスに駆け付け、西部方面隊との調整に入りました。大使と司令官の現地視察も決まり、関係部署と一緒に東京の大使館、福岡の領事館、そして横田の司令部スタッフと細かく調整を重ねました。ものすごい興奮と緊張の中で、西部方面隊と直接作戦を動かしたことで、初めて「自分も西部方面隊のメンバーになれたんだ」と心から実感することができました。